

| | |
|-------------------|---|
| | 岩手大学 農学分野 |
| 学部等の教育研究 組織の名称 | 農学部（第1年次:210 第3年次:5） 大学院農学研究科（M:67） 大学院連合農学研究科（D:32） |
| 沿 革 | 明治35（1902）年 盛岡高等農林学校創立 昭和19（1944）年 盛岡農林専門学校に改称 昭和24（1949）年 新制岩手大学農学部設置 昭和39（1964）年 大学院農学研究科修士課程設置 平成2（1990）年 大学院連合農学研究科博士課程設置 |
| 設置目的等 | <p>岩手大学農学部・農学研究科は、明治35年に創立の盛岡高等農林学校を母体とする。その設立目的は、我が国農林業振興の指導者を養成することと東北農業を特に苦しめていた冷害を克服することにあつた。昭和19年には学制改革に伴い盛岡農林専門学校と改称されている。</p> <p>新制国立大学の発足に当たり盛岡農林専門学校は岩手大学農学部として再出立するが、その設置目的は、大学が等しく有する、学術の中心として広く知識を授け、専門の学芸を教授研究し、応用的能力を授けることにあるとされた。</p> <p>昭和39年には、一般教養と専門知識の広い視野に立ちつつ、一層深く専門分野を考究し、深遠な学識と研究並びに応用の十分な能力を有する人材の養成を目的に、農学研究科修士課程を設置した。</p> <p>平成2年には、高度の専門的能力と豊かな学識を備えた研究者・技術者を養成し、我が国の学術研究の進歩と関連産業並びに社会の発展に寄与することを目的に、岩手大学が基幹校となり、弘前大学、山形大学を構成校とする連合農学研究科博士課程を設置した。平成6年には帯広畜産大学も岩手大学連合農学研究科に参加した。</p> |
| 強みや特色、 社会的な役割 | <p>岩手大学は、東北地域の豊かな資源と風土のもとで、食料や木材の生産、自然環境の保全、生物資源の高付加価値化等の生命と生活を支える農学を考究し、農林水産業の振興と地域や社会の発展に資することを目的に教育、研究、社会貢献に取り組んでおり、以下の強みや特色、社会的役割を有している。</p> |

- 修士課程では、学士課程で培った実践的倫理観を基礎に農林産物、自然保全、資源の持続的利用に関する専門的学力を授け、また情報分析力と科学コミュニケーション能力の育成を重視することで専門的知識と技術及び指導力を有する高度に専門的な人材育成の役割を果たす。更に博士課程では、幅広い寒冷圏農学の知識を持ち、研究適応力、国際的情報発信力を有する研究者や高度専門職業人育成の役割を果たす。
- 地域の自治体や団体及び生産者との交流を通じた課題解決プロジェクト、共同獣医学科や林学分野をはじめとする大学間共同の教育システム、食の安全教育プログラム及び森林系のJABEE認定教育等特色ある教育を進めてきた。またカナダの大学とのデュアルディグリープログラムの開設に向けた取組等、グローバルに活躍できる農学系人材を育成する学部・大学院教育を目指し、不断の改善・進化を図る。
- 植物開花時期短縮技術の開発など、寒冷なフィールドが抱える課題や条件を生かした、生物の多様な環境適応メカニズムに関するバイオテクノロジー、生物工学的手法を駆使した卓越した研究、生物の有する機能性物質の発見とその食品開発などの研究実績を生かし、グローバル化と産業間連携を戦略に農林業の振興、地域社会の維持発展に寄与する。
- 国や東北諸県自治体等への農林業関係審議会委員や各種の計画作成業務に参画している。また、試験研究機関で構成する研究協議会を通じて成果を反映するとともに、企業や団体との共同研究の構築、分権化の中で市町村に役割と権限を委譲された自然資源管理業務への支援など地域社会に多くの貢献をしてきた。今後もこれらの実績を生かし、岩手県をはじめとする東北エリア全体の農林業、食品産業の振興等に寄与する。
- グローバル段階の重要課題である農業者の企業的経営体化と地域牽引型の農林業者再教育の実績、農場から食卓までのサプライチェーン全体に係る食管理プログラムの実行、林業再生と森林環境教育のための人材育成等の実績を有している。今後もこれらを踏まえ、岩手県、東北地方の範囲で社会人の学び直しの取組を推進する。
- 東日本大震災の被災地支援を引き続き強力で押し進める。要望が強いコミュニティの再建支援、水産業とその加工事業への支援、被

| | |
|--|---|
| | 災農地の復旧と高収益型農畜産業支援、林業・林産業支援を継続する。更に水産業の復興・持続的な発展に資する人材の育成を目指す。 |
|--|---|